

学位論文要旨

学位論文題目 日本語の談話における初頭性及び末尾性に関する研究

申請者氏名 熊 磊

文は、話し手が外在的・内在的な要因に基づいて作り出した事柄的な内容と、その事柄をめぐる話し手の主体的な捉え方及び心情・態度のあり方が含まれる、と考えられる。日本語の場合、膠着的な言語であるため、後者は文の末尾に位置していると考えられてきた。しかし、文の初頭にも感動詞類などが来ることから、心情・態度が現れることが観察される。このことから、文の初頭及び末尾には、同じような性質を持った要素が現れる可能性があることが予測される。また、文の初頭及び末尾はどうか、互いにどのように関連するかについては、従来のモダリティ論の観点では不明な点が残っている。

本論文の目的は、日本語母語話者の自然談話のデータに基づき、モダリティ論と異なる観点、即ち言語行動の観点から、文の初頭および末尾に現れる性質(「初頭性」「末尾性」)、及び両者の関係性を解明することである。

文の初頭性及び末尾性を解明するため、日本語母語話者を対象とする談話調査を実施した。談話調査のデータから、まず、文の初頭及び末尾に現れる言語形式(「初頭形式」「末尾形式」)を記述し、それらの言語形式に相当する言語行動(「初頭行動」「末尾行動」)を設定した。すなわち、1つの文の初頭形式及び末尾形式をもとに、初頭行動と末尾行動の関係を観察した。

その結果、初頭行動と末尾行動は、いずれも「聞き手に関わる言語行動」と「命題に関わる言語行動」とによって構成され、同じ性質を持っていることが分かった。さらに、両者の下位行動の配列は、命題を中心として鏡像関係にあることが判明した。

また、2つの文が繋がるときの、前文の末尾行動と後文の初頭行動の関係を分析した。ここでは、「前後文のつながりに関わる言語行動」を設定できた。前後文のつながりに関わる言語行動の組み合わせを観察した結果、その下位行動の配列にも規則的な統合関係があることが判明した。

以上から、さらに文の初頭行動と末尾行動との関係を一般化してみると、「文内部レベル」と「文を超えたレベル」という2つのレベルから、2つの鏡像関係を設定することができた。いずれのレベルでも、一つ一つの鏡像関係がまとまって、チェーンのようにつ

ながっていく。話者が交替しても、交替しなくても、またどんなタイプの談話であっても、談話を展開するときには、話者の言語行動どうしが鏡像関係のチェーンによってつながっていると考えられる。

本論文は、下記のように構成されている。

- 1.では、研究動機と論文の構成を述べた。
- 2.では、日本語の文、モダリティ論、言語行動について、それぞれの先行研究について言及した。その上で、本研究の立場を述べた。
- 3.では、談話調査の要領及び分析対象について記述した。
- 4.では、言語形式を観察した上で、それぞれの言語行動を設定した。具体的には、初頭行動・末尾行動及び初頭形式・末尾形式を定義した。
- 5.では、文の初頭行動・末尾行動の鏡像関係を論じた。
- 6.では、文の初頭行動・末尾行動の統合関係を論じた。
- 7.では、文の初頭行動と末尾行動との関係を、文内部レベルと文を超えたレベルとといった2つのレベルから、2つの鏡像関係を仮定した。
- 8.では、問題点及び今後の課題を述べた。
- 9.では、結びとして、対照言語学的な課題について述べた。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 100 号	氏 名	熊 磊
論文題目	日本語の談話における初頭性及び末尾性に関する研究		
<p>(論文審査概要)</p> <p>本学位論文の目的は、日本語母語話者の自然談話のデータを対象として、言語行動の観点から、文の初頭・末尾に現れる性質（「初頭性」「末尾性」と呼ぶ）、及び両者の関係を解明することにある。</p> <p>本論文の構成・内容は、以下の通りである。</p> <p>第1章では、研究動機・目的を述べている。従来の研究ではほとんど扱われていなかった文の初頭と末尾には、何か関連性があるのではないかと、また、そこにこそ談話を展開する仕組みがあるのではないかと、といった問題提起をしている。</p> <p>第2章では、伝統的な文法論、モダリティ論、言語行動研究における文の捉え方を、先行研究から記述している。前二者では、言語形式に対応した末尾性のみ注目していること、また、言語行動研究では、言語行動が言語形式と結びついていると言うものの、非常に曖昧にしか捉えられていないことを述べた上で、本論文での位置付けを明確にしている。</p> <p>第3章では、談話調査の方法について記している。</p> <p>第4章では、文の初頭・末尾に現れる「初頭形式」「末尾形式」を定義し、その範囲を確定した上で、それらに対応する「初頭行動」「末尾行動」を設定している。初頭行動には、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」といった5つの言語行動を、また末尾行動には、「既出命題に態度を表明する言語行動」といった5つの言語行動を、それぞれ仮定し、詳細な記述を行っている。</p> <p>第5章では、第4章で検証された初頭行動と末尾行動が、文の中の命題を中心に鏡像関係にあることを示している。</p> <p>第6章では、文を超えたレベルでの鏡像関係を示している。連続する2つの文があるとき、前文の末尾行動と後文の初頭行動が鏡像関係を成していることを見出している。しかも、これは、話し手と聞き手が交替するか否かに無関係であることも判明している。</p> <p>第7章は、まとめである。文内部レベルにおける鏡像関係と、文を超えたレベルでの鏡像関係、という2つの鏡像関係が存在することを改めて提示し、これらがチェーンのように繋がることによって、談話が展開しているという仮説を提唱している。</p> <p>第8章は、問題点及び今後の課題である。特に、文よりも大きな言語単位である「発話単位」「話段」においても、第7章の仮説を適用できるかどうか、という点について課題を提示している。</p> <p>以上より、本論文を以下の通り評価した。</p> <p>1. 創造性</p> <p>従来の説を十分に理解した上で、新しい論点、仮説、証明方法が付加されている。特に、従来の文・談話研究では命題が中心だと考えられてきたが、命題以外の部分、即ち初頭行動・末尾行動こそが談話においては重要であり、それが鏡像的に繋がることによって談話展開が成されることを解明した点は、非常に独創性・新規性が高い。当該研究テーマあるいは関連研究分野への貢献は明確である。創造性については極めて優れている。</p> <p>2. 論理性</p> <p>大量の言語データを対象とし、適正な論証手続きに基づいて仮説を検証している。それによって、一貫性のある展開から結論が導かれている点は極めて優れている。</p>			

3. 厳格性

言語行動の観点からの談話研究は非常に少ないが、文法研究に関する先行研究については十分に涉猟咀嚼されている。欲を言えば、先行研究に対する批判的な記述がもう少し必要である。また、言語データの収集・分析方法の厳格性については極めて優れている。

4. 発展性

2つの鏡像関係がチェーンのように繋がり、談話を展開している、という談話展開モデルは、文よりも大きな言語単位にも適用できる可能性が示唆されている。もし可能であるならば、相対的に小さな言語単位が持つ性質が、大きな言語単位に「継承」されていくことになる。この考え方は、音韻論や形態論でも提唱されていることであるが、さらに談話論にも適用されるとなると、大きな発展性を持つものとなり得るだろう。この点においても本論文が極めて優れていると言える。

以上を踏まえた上で、審査委員会における審査委員の合議の結果、本学位論文は全体的に極めて優れていると評価した。従って、論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果
Ⓞ・否

審査委員 主査 (氏名) 有元光彦

(氏名) 村上林造

(氏名) 吉村誠

(氏名) _____ ㊟

(氏名) _____ ㊟